HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 明日香皇女殯宮挽歌論 ： 異文歌と本文歌の「明日」 |
| Author(s) | 伊藤, 延子 |
| Citation | 国語国文研究, 127, 16-28 |
| Issue Date | 2004-07-28 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/93660 |
| Type | journal article |
| File Information | kokugokokubunkenkyu_127-16-28.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 明日香皇女殯宮挽歌論

## ――異文歌と本文歌の「明日」――

伊藤延子

### 一　はじめに

万葉集巻二挽歌の部には、「明日香皇女木瓫殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」（二・一九六～一九八）と題する長歌一首短歌二首から成る作品が収載されている。[注1]

この明日香皇女殯宮挽歌は、長歌の冒頭に明日香川を提示し、末尾に明日香川を形見とする偲ひの表明をして、二首の短歌も明日香川で歌い起こし、皇女名のアスカと同音のアスカ川を強く印象させつつ皇女を深く哀悼している。

その歌群とじめの短歌第二首には、

明日香川明日だに見むと思へやも我が大君の御名忘れせぬ　（一九八）

と、長歌には見られない、「時」を示す、「アス」が登場する。この「アス」の音の登場は、「明日香皇女」と「明日香川」の同一音、「アスカ」も括ることになる。よって、歌群は、最後の一首において、「皇女」と「川」と「時」と、三者を「アス」という同音で括るという姿を現している。「アス」が重ねて用いられることについては、如何なる意味があるのであろうか。

明日香皇女殯宮挽歌には九箇所の「一云」異文注記があり、この短歌第二首の一九八歌には三箇所見られる。異文と本文の関係は、沢瀉久孝氏が『万葉集注釈』（以下『注釈』と略称する。他の注釈書もこれに従う。）において、二つの別なる作品という見方を示され、[注2]また伊藤博氏、渡瀬昌忠氏などの先行研究において、制作時期の上で先後関係にあることが説かれている。わたくし自身も「人麻呂献呈挽歌の『不寐者』――異文歌と本文歌――」（「美夫君志」六十一号、二〇〇〇年十一月）で論じたように、異文が先、本文が後と見なす。すなわち、異文と本文の「明日」は、別なる二つの「明日」

と考えられることになる。

それならば、異文の「明日」と本文の「明日」は、如何なる意味を表すのであろうか。従来の研究において、異文と本文の先後関係については論じられているが、その際に、特に「明日」の相違について論じられることはなかった。

そこで、本稿は、異文と本文の「明日」について考察する。そして、「アス」の音が重ねられるその意味について考える。さらに、その考察を通じて、明日香皇女殯宮挽歌という作品が志向するものについて考えてみたい。

左に示すように、異文歌と本文歌について、異文注記を①②③④⑤⑥⑦⑧⑨で示し、長歌の段落を次のように、五つに分けて考察をすすめることにする。

1、冒頭～枯るれば生ゆる
2、なにしかも～背きたまふや
3、うつそみと～目言も絶えぬ
4、そこをしも（しかれかも）～せむすべ知れや
5、音のみも～形見にここを

（異文歌）

明日香皇女木瓱殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

1飛ぶ鳥の　明日香の川の　　飛ぶ鳥の　明日香の川の
上つ瀬に　石なみ(石浪)渡し　①上つ瀬に　石橋(石橋)渡し
下つ瀬に　打橋渡す　　下つ瀬に　打橋渡す
石なみに(石浪)　生ひなびける　②石橋に(石橋)　生ひなびける
玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる
打橋に　生ひをれる
川藻もぞ　枯るれば生ゆる
2なにしかも　我が大君の
立たせば　玉藻のもころ
臥やせば　川藻のごとく
なびかひし　宜しき君が
朝宮を　忘れたまふや
夕宮を　背きたまふや
3うつそみと　思ひし時に
春へには　花折りかざし
秋立てば　もみち葉かざし
しきたへの　袖携はり
鏡なす　見れども飽かず
望月の　いやめづらしみ
思ほしし　君と時とき
出でまして　遊びたまひし
御食向かふ　城上の宮を
常宮と　定めたまひて
あぢさはふ　目言も絶えぬ
4そこをしも(所己乎之毛)
あやに哀しみ
ぬえ鳥の　片恋しつつ(為乍)
朝霧の(朝霧)　通はす君が

（本文歌）

玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる
打橋に　生ひをれる
川藻もぞ　枯るれば生ゆる
なにしかも　我が大君の
立たせば　玉藻のもころ
臥やせば　川藻のごとく
なびかひし　宜しき君が
朝宮を　忘れたまふや
夕宮を　背きたまふや
うつそみと　思ひし時に
春へには　花折りかざし
秋立てば　もみち葉かざし
しきたへの　袖携はり
鏡なす　見れども飽かず
望月の　いやめづらしみ
思ほしし　君と時とき
出でまして　遊びたまひし
御食向かふ　城上の宮を
常宮と　定めたまひて
あぢさはふ　目言も絶えぬ
③しかれかも(然有鴨)
あやに哀しみ
④ぬえ鳥の　片恋づま(嬬)
⑤朝鳥の(朝鳥)　通はす君が

夏草の　思ひ萎えて
夕星の　か行きかく行き
大船の　たゆたふ見れば
慰もる　心もあらず
そこ故に　せむすべ知れや
5音のみも　名のみも絶えず
天地の　いや遠長く
偲ひ行かむ　御名にかかせる
明日香川　万代までに
はしきやし　我が大君の
形見にここを　（一九六）

短歌二首

明日香川　しがらみ渡し
塞かませば
流るる水の淀にかあらまし
（水乃与杼尓加有益）（一九七）
明日香川　明日さへ（左倍）見むと
思へかも（念香毛）
我が大君の　御名忘らえぬ
（御名不所忘）　（一九八）

## 二　異文と本文の「明日」

歌群最後の歌である短歌第二首（一九八）は、三箇所の異文注記

夏草の　思ひ萎えて
夕星の　か行きかく行き
大船の　たゆたふ見れば
慰もる　心もあらず
そこ故に　せむすべ知れや
音のみも　名のみも絶えず
天地の　いや遠長く
偲ひ行かむ　御名にかかせる
明日香川　万代までに
はしきやし　我が大君の
形見にここを　（一九六）

短歌二首

明日香川　しがらみ渡し
塞かませば
⑥流るる水ものどにかあらまし
（水母能杼尓賀有萬思）（一九七）
⑦明日香川　明日だに（谷）見むと
⑧思へやも（念八方）
⑨我が大君の　御名忘れせぬ
（御名忘世奴）　（一九八）

⑦⑧⑨を有し、異文と本文とは次の傍線部に見るように、

明日香川明日さへ見むと思へかも我が大君の御名忘らえぬ
（異文歌）
明日香川明日だに見むと思へやも我が大君の御名忘れせぬ
（本文歌）

⑦「さへ（左倍）」と「だに（谷）」、⑧「思へかも（念香毛）」と「思へやも（念八方）」、⑨「御名忘らえぬ（不所忘）」と「御名忘れせぬ（忘世奴）」の相違を有する。

これによれば、時を示す「明日」は、異文歌では「明日さへ」と言い、本文歌では「明日だに」へと改稿されている。異文の歌と本文の歌とはどのように相違するのだろうか。歌の解釈については諸説見られるが、とりわけ、集中一例のみの「思へやも」の句を含み、複雑な本文歌の解釈について、『大系』は、

せめて明日だけでも（お逢いしたいが）、お逢い出来るだろうとは思えないのに、わが明日香皇女の御名を忘れることができない。

と訳出している。この、「思えないのに」と述べる逆接の解釈は、それまでに見られない新しい解釈である。それに関しては、詳細に稲岡耕二氏が説かれているとおりで（「人麻呂作歌異伝攷（二）」『万葉集研究』十二集、一九八四年四月）、『大系』の訳出は首肯されるべ

きと考えられる。(他に、逆接と解釈する論文に、平舘英子氏、倉持しのぶ氏などが見られる[注3])。但し、末句の「忘れせぬ」に対する「忘れることができない」とする訳出は従い難い。平舘氏や倉持氏が述べておられるように、「忘れない」と訳されるべきであろう。

異文歌の方の解釈について『大系』は、「明日もまたお逢い出来るだろうと思っているからか、明日香皇女の御名が忘れられない。」と訳出している。異文歌の場合の「思へかも」は集中の例と照らして、先行研究も述べるように、疑問の条件句と考えられるのであり、『大系』の解釈の通りである。時を示す「明日」は、異文では、「明日もまた」という意味を担う明日として現れていたのに対し、本文では「せめて明日だけでも」という意味を担う明日へと変化して現れているのである。

人麻呂歌集略体歌にも、同じように、或本歌「さへ」、本文歌「だに」の異伝を有する例が見られる。

直不相　有諾　夢谷　何人　事繁　或本歌曰　寤者　諾毛不相　夢左倍　（十二・二八四八）

本文歌も或本歌も同じ下句をもち、本文歌の場合は「夢にだに何しか人の言の繁けむ」で、現実はともかくとして、せめて、夢の中で逢いたいが、その「夢の中でだって」どうして、噂が高いのだろうの意で、「夢の中」は、現実と隔絶している。それに比べると、或本歌の方は「夢にさへ何しか人の言の繁けむ」で、現実に加えて「夢の中もまた」人の噂が高い意であるから、現実と夢とは継続している。

この二八四八歌の「だに」と「さへ」について中西進氏の『全訳注原文付』は、「方向性が異なるが強調性は同じ」と述べ、さらに一九八歌の参照を促しておられる。そこで、一九八歌の場合について考えてみると、異文の「明日さへ」は「継続的な明日」を表し、本文の方の「明日だに」は「隔絶的な明日」を表す、性格の異なる「明日」が強調されていると考えられる。つまり、異文の方の明日は、「継続的な」明日を表したが、本文においては、継続的ではない明日の表現へと変ったと考えられるのである。そうして⑧⑨も⑦に連動した改稿と考えられる。

ところで、「殯宮之時」については、従来いろいろ説が見られる。「殯宮」の意味を、なかには、殯宮期間中を表すのではなく、「葬」と同義語のように考える説も見られる[注4]。それに対し、基本的には殯宮期間中であることをみとめつつ、渡瀬昌忠氏は「明日香皇女殯宮挽歌」(『著作集第七巻　柿本人麻呂作歌論』所収二〇〇三年三月、初出一九七七年十二月)において、

「一に云ふ」の異文の存在は、明日香皇女挽歌がやや時点を異にした二度の発表の場をもったことを示し、そこに推敲のあとを辿ることができる。……

明日香皇女挽歌は、皇女の殯宮期間の末期に、皇女生前の居所であった夫君忍壁皇子の宮もしくは殯宮の営まれていた木瓫の宮で発表するべく、人麻呂によって作られた長反歌であった。

と述べられ、「殯宮期間の末期」における二度の発表という考えを示されている。私見も時点の異なる異文と本文との関係から、時期を隔てる殯宮の期間を表すと考える。しかし、異文も本文も両方とも、「殯宮期間の末期」であるのかどうか、それに関しては速やかに述べ難く思われる。

それならば、時期を隔てることについてはどのように考えたらよいのであろうか。そして、そのことと「明日」とは、どのように関係するのであろうか。異文と本文の時間について、より具体的に考察する必要がある。そこで、この問題を考えるために、異文の「明日さへ」と本文の「明日だに」について、さらに検討を加えたいと思う。前述により、「明日さへ」と「明日だに」とは、「継続的」と「隔絶的」という性格の異なる「明日」と考えられるのであるが、その「異なる性格」と時間とは具体的にどのように関係するのか、集中の「明日さへ」と「明日だに」の用例を検討して考察する。

集中に見られる「明日さへ」の例は、次の五例である。

一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ（明日左倍）見まく欲しき君かも　（六・一〇一四）

池の辺の松の未葉に降る雪は五百重降り敷け明日さへ（明日左倍）も見む　（八・一六五〇）

月日選り逢ひてしあれば別れまく惜しかる君は明日さへ（明日副）もがも　（十・二〇六六）

佐保川の川波立たず静けくも君にたぐひて明日さへ（明日兼）もがも　（十二・三〇一〇）

坂越えて安倍の田面に居る鶴のともしき君は明日さへ（安須左倍）もがも　（十四・三五二三）

五例とも挽歌ではない点で当該歌とは異なるが、希求や願望を表す「見まく欲しき」「見む」「もがも」の語を伴い、「明日」は、今日に引き続き継続する時間を表している。当該歌の場合も同様に、未来を推量する「見む」により、「明日」は今日に引き続く、ある等質の時間の継続を表すと考えられる。それを題詞の記載に合わせると、同一の期間にあって継続する時間――、殯宮期間中を表すと考えられるのではないだろうか。ここからは、特に期間の初期とか、或いは末期とか限定することはできないが、明日も今日に引き続き殯宮の期間中である時間を表すと考えられる。

一方、「明日だに」の例は集中に一例も見られない。そこで人麻呂関係歌の、「時を表す語＋だに」の確例を探すと、次に示す例が見られる。

イ我が待ちし秋萩咲きぬ今だに（今谷）もにほひに行かな彼方人に　（十・二〇一四）

ロ恋しくは日長きものを今だに（今谷）もともしむべしや逢ふべき夜だに（夜谷）　（十・二〇一七）

イロは七夕歌である。「今」とは、一年に一度だけ逢会を許される七月七日の夜のことである。「だに」によって、逢会が許される、区切られた時間であることの意味が強調されるのである。すなわち

「今」は、七月六日から継続しないし、七月八日に継続しない、隔絶された七月七日のみの時間である。

よって、当該歌の「明日だに」が表す時間も、今日と等質の時間が継続しない、隔絶的な明日を表すと考えられるであろう。時間の隔絶は、「今日」において決定的なことのあることが推測されるが、例えば現実の問題としてどのようなことが考えられるのであろうか。一つの可能性として、埋葬の行われることが考えられるのではないだろうか。「今日」の日に埋葬が行われることにより、殯宮期間が終了してしまうゆえ、「明日」の日は隔絶された時間となるのではないだろうか。

前述したように、集中に「明日だに」の例は見られないが、挽歌における「明日」の例には、次のような歌も見られる。

ハうつそみの人なる我や明日より（従明日）は二上山を弟と我が見む　（二・一六五）

ニつのさはふ　磐余の道を　朝去らず　行きけむ人の　思ひつつ　通ひけまくは　ほととぎす　鳴く五月には　あやめぐさ　花橘を　玉に貫き　〈一云　貫き交へ〉　縵にせむと　九月の　しぐれの時は　もみち葉を　折りかざさむと　延ふ葛の　いや遠長く　〈一云　葛の根の　いや遠長に〉　万代に　絶えじと思ひて　〈一云　大船の　思ひ頼みて〉　通ひけむ　君をば明日ゆ（明日従）　〈一云　君を明日ゆ（従明日）は〉　外にかも見む　（三・四二三）

ハは、題詞に「移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大来皇女哀傷御作歌」とあり、持統元年（六八七）二月、大津皇子が二上山に移葬された時の歌である。刑死大津皇子の屍は、その生前の宮磐余の宮に営まれた殯宮から二上山頂の墓陵に移葬されたらしい（『釈注』）。歌は、弟の葬られている二上山を、「明日から」はずっと弟として見つづけよう、という強い意志を表明し、「より」は起点を示している。「今日」と「明日」との境目には移葬が存在する。「明日」は、「今日」と継続しない、隔絶された時間を表している。

ニは、題詞に「同石田王卒之時山前王哀傷作歌」とある。異文、本文とも「明日ゆ」で、「明日から」は、君を「よそ」に見るのだろうか、の意である。それを例えば『新大系』の、「この世ならぬよその人として」と解すると、「明日ゆ」と歌う、「ゆ」の意味には、「この世」（今日まで）と「この世ならぬ」（明日からは）、境目があることになる。「明日」は「今日」と継続しない。

このように、ハニに見られる「明日」は、「今日」と継続しない、隔絶的な「明日」を表している。当該歌の「明日だに」と共通する。ハには「移葬」、ニには「この世ならぬ」境が、「今日」と「明日」との境目に見られる。当該歌の場合も、殯宮期間中という時間から考えると、「今日」と「明日」との境目に埋葬が行われることが推測されるのである。

「明日」と「殯宮之時」の関係について考察したことを整理すると、次のようになる。

異文　継続的な「明日」＝殯宮期間中。皇女の亡骸はまだ殯宮にある。

本文　隔絶的な「明日」。「今日」が殯宮の終了時＝埋葬の日。したがって「明日」は、皇女埋葬後となる。

右の如くに、異文と本文とでは「明日」の担う意味が異なる。これによれば、先述における渡瀬氏の異文本文ともに「殯宮期間の末期」と説かれている点に関しては、本文については首肯されるが、異文については留保されることになる。

異文と本文とにおける二つの「明日」は、「今日」と「明日」との、その境目にある時間が継続的であるのか、或いは、隔絶的であるのかという、時間の性格の相違を示していると考えられるのである。

このようにして、明日香皇女殯宮挽歌において、歌群とじめの短歌第二首に見られる「明日」の表現は、一方の、異文の方の「明日」は殯宮期間中の時間を表し、他方の、本文の方の「明日」は殯宮の終了後の時間を表すと考えられる。その、担う意味の異なる二つの「明日」は、長歌や短歌第一首とはどのように関係するのだろうか。次節において考察する。

## 三　長歌及び短歌第一首の異文と本文

長歌及び短歌第一首の異文と本文の考察に入る前に、長歌の展開について概述する。まず、話者の人物についてであるが、話者に関して詳しく論じておられる身崎壽氏の諸論文[注5]に学び、人物像の設定について考えたいと思う。話者にはどのような人物が相応しいのであろうか。内容を追っていくと、皇女の日常生活や、夫婦間の細部に及ぶことや、残された夫君のことなどを熟知し得る立場の人物であることが推測される。そこから話者の像の可能性は、夫妻の側に仕える、より夫君に近しい人物であると考えられる。

長歌の展開を文中に数字で示した五つの段落にしたがって概述すると、冒頭の1において、明日香川の景が提示され、その橋に生える川藻の再生することが繰り返される。2において「なにしかも……なびかひし　宜しき君が　朝宮を　忘れたまふや…」と詰問するように、明日香皇女の死が暗示される。3において、皇女生前時、夫君と城上の宮へ出遊した回想と、その思い出の宮に今は鎮座することが述べられる。4において、皇女に先立たれた夫君の、居所である宮殿と殯宮を往来する悲嘆のさまが、話者の視覚を通して述べられる。5において、永代まで皇女を伝える偲ひの表明がされる。

以上に概述した五つの段落において、異文注記は、1①②と4③④⑤の合計五箇所に見られる。そのうち1①②の、「石なみ（石浪）」から「石橋（石橋）」への改稿は同じ意味の語への書き換えであり、時間に直接影響しないと考えられるが、これについても後に述べるように連動した改稿と考えている。ここではとりあえず置き、時間との影響関係を推測させる4③④⑤について考察する。

4③④⑤は、皇女が薨去し、亡骸が城上の殯宮に移され鎮座した後の夫君の行動を述べる個所に見られるもので、③④⑤は次のごとくである。

③　異文「そこをしも（所已乎之毛）」→　本文「しかれかも（然有鴨）」

④　異文「片恋しつつ（為乍）」→　本文「片恋づま（嬬）」

⑤　異文「朝霧の（朝霧）」→　本文「朝鳥の（朝鳥）」

③異文の「そこをしも」は、「あやに哀しみ」にかかり、「あやに哀しみ」は「…片恋しつつ」にかかり、「通はす君」は、「通はす君」に繋がっていく。したがって、「そこをしも……通はす君」は、「通はす君」へと逐次的に連関しつつ、君が「殯宮」に「通う」という、その行為の理由を述べている。「そこ」は、前の語を指示するから、「…あぢさはふ目言も絶えぬ」とある、皇女が薨去し殯宮に移された、夫婦間に生じた出来事を指していると考えられる。そして、「そこ」には強調を表す「し」が添えられ、その事態が強調されている。その強調は「あやに」に密接する。「あやに」には、配偶者の死に直面した夫君の感情が生々しく強調されている。「片恋しつつ」と反復を表す表現は、夫婦の片方の者が死し、片方が残された、別離の事態が生じたからに他なるまい。

一方、③本文の「しかれかも」は、集中に他例が見られず、その承接には議論があるが、『山田講義』の述べる通り、十一句を隔つ「たゆたふ」にかかると考えるのが穏当であろう。本文の「しかれかも」は、「あやに哀しみ」にはかからないことになる。疑問を表す「か」に拠り、「しかれかも」は話者の心情を反映した表現となっている。ここでいったん隔絶している。このように、本文においては、皇女が薨去し殯宮に鎮座していることは、話者にいったん承けとめられている点が異文とは異なっている。そして、本文では、「君」は、四句を費やして「ぬえ鳥の　片恋づま　朝鳥の　通はす君」と形象化されて主語に据えられている。その形象化を見ると、動作の反復を表す④異文の「片恋しつつ」は、本文において「片恋づま」と名詞化され、枕詞の「朝霧の」は、「ぬえ鳥の」と同じく鳥による枕詞の、「朝鳥の」へと変化している。異文は、「君」が殯宮に「通う」理由をことさらに述べているのに比べて、ここ本文は、「君」が主語として正面に据えられて悲嘆するさまが、ことさらに強調されている相違が見られる。

ここまでの、異文注記の4③④⑤について検討したことを整理すると、次の如くである。

異文　皇女の死に直面した夫君が殯宮に通う理由を述べるところに表現の比重がある。

本文　悲嘆の夫君を主語に据えて正面から描くところに表現の比重がある。

このように異文と本文とは相違しており、したがって、後の「慰もる　心もあらず」へと接続されるものが相違することになる。その相違はまた、直ぐ後に続く、「そこ故に　せむすべ知れや」にも繋がる。「そこ」は前段「慰もる　心もあらず」を受ける指示語である。そして、長歌末尾の5も、この展開のもとに受け継がれるのである。こうして、4における③④⑤の異文注記は、4以後の展開の全てに、芋蔓のように関連している。異文注記4③④⑤の検討により、異文と本文における時間は、同一の時間ではないことが知られるのである。

こうした長歌の異文と本文の展開の相違は、話者の態度の、

異文の、皇女の死を中心とする態度

本文の、残された夫君を中心とする態度

の相違によるもので、その相違が異文と本文の4以後の展開をそれぞれに導いていくのであり、長歌末尾の偲ひの表明も、その相違に

立つことになるのである。話者の立脚する時点が異っているのである。

また、先にも少しふれたように、長歌の異文の方は、逐次的で繋がりがなだらかであるのに比べ、本文の方は、途切れがちで、隔絶的である。異文注記①②に示される「石なみ」から「石橋」への改稿について考えてみると、「石なみ」も「石橋」も共に、川に置かれる踏み石を意味する語でありつつ、「石なみ」からは横並びのようなイメージが喚起され、「石橋」にはそれがない。改稿は文脈に微妙に連動しているのではないだろうか。

最後に、短歌第一首一九七歌の異文と本文について考察する。

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水の淀にかあらまし
（水乃与杼尓加有益）（異文歌）
明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし
（水母能杼尓賀有萬思）（本文歌）

明日香川にしがらみを渡して、その水の流れを塞き止めたならば、と仮定する第三句までは、異文も本文も同じである。その仮定条件を受ける「流るる水」の展開が、異文では「淀（与杼）」、本文では「のど（能杼）」の語によっている。「淀」と「のど」にはどのような相違があるのであろうか。集中の例を見ると、「淀」の方は、二十七例（当該歌を除く）見られるのに比べ、「のど」の方は、当該歌を除くと、二例にすぎない。二例は「吹く風も　のど（和）には吹かず」（十三・三三三五）、「立つ波も　のど（篦跡）には立たぬ」（十三・三三三九）と見え、「吹く風」や「立つ波」の状態を表している。当該歌も「流るる水」の状態を表すと考えられる。一方、「淀」の例には、「落ち激ち流るる水の岩に触れ淀（与杼）める淀（与杼）に月の影見ゆ」（九・一七一四）などが見られるように、「淀」は流れている水が停滞して溜まることを意味している。当該歌も同意に解せられると考えられる。それらに照らして、異文の「淀」は、流れる水の停滞することを、本文の「のど」は、流れる水がゆっくりと流れる、その流れる状態を表すと解されるのではないだろうか。

そして、この「淀」と「のど」とによる、「流るる水」の表現には、皇女の死が暗示されているのではないだろうか。異文の「淀」には、皇女の死さえ訪れることがなかったならば、夫君も悲しまずにすんだのだ、という、皇女の薨去に直面した話者の心情が反映されていると考えられ、それは、長歌異文の「そこをしも」以下の表現の流れに照応している。一方、本文の「のど」には、死の訪れは「もっとゆっくりであったろうか」と、死をより受け入れた話者の心情が反映されていると考えられ、それは、長歌本文の「しかれかも」以下の歌の流れに照応している。「淀」と「のど」とによる異文と本文の表現の相違は、死の受容度の相違を表すと考えられる。したがって、その相違は、一九七歌の異文と本文もまた、長歌の異文と本文同様に、立脚する時点の相違を示すものであると考えられるのである。

ここに来て、問われなければならないのは「明日香川」の、その表現性にあると思われる。「明日香川」には如何なる意味があるのであろうか。「明日香川」の表現は長歌の冒頭と末尾、短歌二首、あわ

せて四箇所に見られるが、その表現を追うと、「明日香皇女」と関り深く表現されている。そのことをどのように考えたらよいのであろうか。

「明日香皇女」の登場は、長歌2段落において、「明日香川」の橋の、生命力豊かで、「絶ゆれば」再生を繰り返す藻に擬えられつつ、「なびかひし　宜しき君が　朝宮を　忘れたまふや　夕宮を　背きたまふや」と、回想を表す助動詞「し」をもって、夫君との愛の深かりし宮を、不在にするのを咎められるが如くに描かれている。その「皇女」の描出は、「明日香川」の美しい藻に比喩されつつ、しかも、その藻の喩性さえ、夫君との愛の深かりしを示すための媒介として機能し、夫君の登場を導くという展開の中に見られる。そこから考えると「明日香川」は、皇女の象徴というばかりではなく、夫君と皇女の交情を奥深く象徴させていると考えられるのではないのだろうか。

また、長歌の末尾に、「明日香川」を「皇女」の形見とする偲ひが表明されるが、何故に、「皇女」の形見が「明日香川」なのであろうか。挽歌の形見の常と考えられる生前の宮でもなく、思い出深い城上の宮でもなく、御名と同一のゆかりに求めて、「明日香川」が形見にされるのは何故なのであろうか。それは、歌群とじめの短歌第二首に現れる「明日」と包摂関係にあることを示すためなのではないだろうか。こうした他には見られない形見の表現がもたらされたのは何故かといえば、「明日香川」が夫婦の交情の断絶を象徴するべく用いられたからに他ならないとわたくしは考える。「明日香川」の表現性は主題と深く関って解かれるべきであろう。

ここまで、明日香皇女殯宮挽歌の短歌第二首において現れる「明日」について、異文と本文の先後関係から、立脚する時点の異なる二つの「明日」と考える仮説に立ち、長歌及び短歌第一首の異文と本文について考察した。その結果、異文と本文は時点の相違する「明日」に帰納される。先行の諸説及び私説により、本文系統は殯宮終了時、異文系統はそれ以前と想定した仮説は、表現上、矛盾がない。

そうすると、歌群全体のとじめに至って初めて、それまでの長歌や短歌第一首には見られなかった「明日」が現れる意味は、どのように解されるのであろうか。

渡辺護氏は、「『明日よりは』とうたう意味」（「万葉」一四〇号、一九九一年十月）において、

> 「明日よりは」という一句が、単独の一首中ではなく、歌群の中においてはじめて独特の意味を有してその効果を発揮することを述べてきた。そして、その一句を含みもつ一首が、多くの場合それが属する歌群の最終部に位置してきわめて作品的な効果をあげることも述べた。とくに別離の主題をうたう歌群においてもその点は保証されると思われる。

と、述べておられる。当面の場合は、異文歌の最終部に「明日さへ」、本文歌の最終部に「明日だに」として現れるが、その意味するところは、前述により、「明日さへ」は今日と継続的な明日の意味であり、「明日だに」は、今日と継続しない、隔絶的な明日を表すから、渡辺氏の述べられる「明日よりは」に共通するのは、本文歌の方と考え

られる。そして、当面の歌群も別離を主題とする。私見も渡辺氏と同様に考えるものである。

では、明日香皇女殯宮挽歌において、「明日」の語が最後に現れる意味はどのように考えられるのであろうか。

「明日」それ自体は、長歌5における偲ひの表明の、

音のみも　名のみも絶えず　天地の　いや遠長く　偲ひ行かむ
御名にかかせる　明日香川　万代までに　はしきやし　我が大君の　形見にここを

とある部分に対応する、「永久」という未来の時間を表すと考えられる。

しかし、前述したように、長歌の異文は、皇女の薨去に直面した夫君の悲しみに即し、本文は、皇女薨去後のひとり残された夫君の悲しみに即している。そのように異文の「明日」と本文の「明日」とは、異なる時を示しつつ、しかも、どちらの「明日」も、皇女亡き後の夫君の悲嘆に関っているのである。

それゆえ、「宜しき君」の、皇女に先立たれてからの、別離の時間を「明日」と呼んでいると考えられる。その考えに至るとき、「明日」を最後に登場させて歌群を閉じる意味は、この明日香皇女殯宮挽歌は、残された配偶者を主題とする別離を描くことを志向したからに他ならない、という考えに導かれるのである。

長歌における異文注記が、夫君の悲嘆の叙述に集中して見られる点も、また短歌第一首におけるそれの示す、皇女の死に対する心情についても残された者の観点からのものであり、配偶者との別離の主題を反映するものに他ならないと考えられるであろう。

そして、その別離の主題は、本文歌の埋葬という決定的な死者との別離の時点に立ったとき、決定的な配偶者との別離の主題が描き切られたと解されるのではないだろうか。

## 四　結び

叙上のごとく、明日香皇女殯宮挽歌は、皇女薨去後の時間を「明日」と表現することにより、その「明日」に、残された配偶者の時間を象徴させ、「明日香川」に亡きひと「明日香皇女」と夫君との深かりし夫婦の交情を象徴させている。「明日香皇女」「明日香川」「明日」と見られる、この、「アス」という同一音で統一されている名辞のありようは、「明日」を主題とさせるべく、すなわち、皇女亡き後の、配偶者の残された時間を主題とする配偶者との別離を描くべく、作者人麻呂が構想した作品の「仕組み」として理解されるのではないだろうか。

「明日香川」は、実在する川名ではあるが、むしろ、別離を主題とするための文芸的な意図に基づく、例えば、泣血哀慟歌の「羽易山」や、石見相聞歌の「高角山」などと通い合う、主題への要求が作り出した名称として機能しているのではないだろうか。

当歌群における四箇所のアスカの原文表記は、「明日香乃河」「明日香河」（一九六）、「明日香川」（一九七、一九八）であるが、人麻呂歌集略体歌の十二・二八五九歌には「飛鳥川」の表記も見られる。

皇女名の場合は、『紀』には「飛鳥皇女」（天智七年二月、持統六年八月）、「皇女飛鳥」（持統八年八月）、『続日本紀』には「明日香皇女」（文武四年四月）と見られる。よって、皇女名も川名も「明日香」と「飛鳥」の両表記が見られるのである。しかるに、当歌群では全てに「明日香」と表記され、しかも異文注記を有しない統一された姿を見せているのである。なお、巻一・二の人麻呂作品の表記に関しては、曾倉岑氏「人麻呂の異伝をめぐって――巻一・二場合――」（「美夫君志」七号、一九六四年六月）などに、人麻呂自身の手になることが説かれている。

明日香皇女殯宮挽歌における、長歌短歌四箇所とも全てに「明日香」と見られる川の名の表記は、皇女名の「明日香」ともども、「明日」という仕組みに統一させた、作者人麻呂の文芸意識に基づく必然的な表記として理解されるのではないだろうか。

以上の考察により、明日香皇女殯宮挽歌は、「明日」という仕組みにより、配偶者との別離の主題を遺憾なく描き切った作品と考えられるのである。

＊　本文引用は『新編日本古典文学全集　万葉集』に拠った。但し一部私見により変えた。

＊　引用文中の返り点は省略した。

（注1）この作品は、『続日本紀』文武天皇四年（七〇〇）四月四日条に「浄広肆明日香皇女薨去」と記載されるところにより、人麻呂の年代分明の最新作品と考えられる。

（注2）伊藤博氏は、「挽歌の誦詠」（「国語国文」一九五七年二月、『万葉集の表現と方法　上』所収、一九七五年十一月）において、人麻呂の殯宮挽歌が殯宮と生前の場所との「一度ならず唄われたと見る」考えを示された。但し、近時の伊藤博氏『万葉集釈注』明日香皇女挽歌釈文では、「異文系統は、人麻呂の机上に成った初案、本文系統はいよいよ発表するに当っての推敲で、近江荒都歌や石見相聞歌などの場合と創作の過程が異なるもののように思われる」と述べられている。

渡瀬昌忠氏は、「島の宮（下）――人麻呂文学の基点――」（「文学」一九七一年十二月、『著作集第六巻　島の宮の文学』所収、二〇〇三年二月）において、「公的挽歌が本文のほかにいま一つの異伝を有するならば、それもまた時を異にする二回の発表の間の推敲であったと仮定することができる」と述べておられる。

（注3）平舘英子「明日香皇女挽歌の表現と構想」（「万葉」一三七号、一九九〇年十一月、『万葉歌の主題と意匠』所収、一九九八年二月）

倉持しのぶ「人麻呂『明日香皇女殯宮挽歌』試論」（「国語国文研究」九十九号、一九九五年三月）

（注4）平舘英子「『殯宮之時柿本朝臣人麿作歌』への考察」（「目白国文」十号、一九七一年三月）

武藤美也子、風間力三「人麻呂挽歌の『殯宮之時』をめぐって」（「甲南大学紀要」三十六号、一九八〇年三月）

（注5）身崎壽「明日香皇女殯宮挽歌試論――その表現の方法をめぐって――」（「文学・語学」九十三号、一九八二年六月）

同「吉備津采女挽歌試論――人麻呂挽歌と話者――」（「国語と国文学」一九八二年十一月）

同「人麻呂挽歌の〈話者〉」（「日本文学」一九八八年一月）

同「歌の中の叙述の主体という観点はどのような歌のよみかたをひらくか」（「国文学」一九九六年五月）など。

（いとう　のぶこ・北海道大学大学院博士課程）